

書評

藤本 満

『キリスト者の完全』

(インマヌエル総合伝道団、2006年)

坂本 誠

『キリスト者の完全』を以前の版で読んだのはいつだったであろう。神学生時代であったと思うが、とても感銘を受けながら読んだことを覚えている。しかし、改めて振り返ると、「キリスト者の完全」という言葉だけが印象に残り、「完全」という言葉に惑わされてしまい、どちらかと言えば、本棚の片隅にずっとあり続けた本であった。

それと共に、評者の中では、常にある一つの思想表現があり続けた。おそらくどこかのウェスレーの解説書で読んだのかもしれないし、ウェスレー自身の言葉かもしれない。しかし、どれだけウェスレーの原典にあたってもこの言葉に出会わない。それは、例えとしては、適切さを欠くのであるが、以下のような言葉である。

「キリスト者が自分の心の中にキリストを迎え入れた時には、まだキリストが大統領になることを妨げているものがたくさん残っている。しかし、最終的にキリストが心の中心にあって大統領として君臨してくださり、すべてのものを秩序づけて下さることが起こり得る。それがキリスト者の完全である。」

評者はこの言葉に妙な納得感を覚えた。それまでは、自分には完全は達成

できるはずがないという意識があり、その後は敬遠気味であった。しかし次第に、この言葉は評者の心を占めて、完全を考える時に、ある程度の幅広さを与えてくれたように思う。今回、このような原体験とも言える一つの命題を心に秘めて、藤本氏による『キリスト者の完全』を読む機会が与えられた。まず、そのことに感謝したい。

今回出版された筆者による『キリスト者の完全』は、訳も確かで読みやすく、洗練されたものである。さらに最大の特徴は、難解な言葉に注釈がつけられており、どのような文脈で文章が書かれたかという解説が注という形において解説されていることである。これは読者にとっては大きな助けである。

ウェスレーが『キリスト者の完全』を著した背景には、彼の主張した完全論に対して誤解が生じ、特に完全を実体的に捉え、罪なき完全を主張する人々が存在したわけであるし、そのような事情を全く理解せずに完全を理解しようとする、完全理解に誤解を生じたり、ウェスレーの全く意図しない方向へと進んでいってしまう。そのことを避ける為の、最大限の助けがこの書には存在する。

さて、評者の書齋には、オルソンの手による最近の『キリスト者の完全』という書物がある。この書物も全体的には藤本と同様の意図において書かれたものである。本文以外にも膨大な量に及ぶ解説、注釈が占めている。何と3分の2が本文以外のもので占められているのである。それほど、ウェスレーの書いた「キリスト者の完全」は難解であったということであろう。特にこの書を読むには18世紀英国の英語に精通していなければならないが、これもまた日本人読者が『キリスト者の完全』を読むのを困難にする原因となっている。その意味で、藤本同様、オルソンのキリスト者の完全を英語で読むと、さらに異なった発見をすることがある。そもそも、「キリスト者の完全」という用語は、原文では**”Plain Account of Christian Perfection”**である。最近出た著書の中で、野呂は『明解 キリスト者の完全』とする。この**Plain**には「平易」「飾り気のない」とか、そのような意味があるわけであるが、これはウェスレーの口癖であった**”Plain word for plain people”**と一緒に考えるべきである。前者は明解で通じるが、後者の**plain**は「一般の人々」という意味が強いのではないかと常々考えている。これだけ見てもこの書物を理解する上で

の困難を思わずにはいられない。

この難解な『キリスト者の完全』が日本語で私たちの前にあるのだからこんなに素晴らしいことはない。それも解説付きで手元において読むことができる。特にこの書の解説は適切である。これまで読みながらも疑問に思っていた言葉や状況が細かに指摘されている。

特に前述したように、ウェスレーが『キリスト者の完全』を明解にしなればならなかったか。その事情がとてもよく描かれている。さらに、様々な教義を、プラクティカルに展開したウェスレーの意図に関する説明はすばらしいに尽きる。さらにテイラーについての説明はとても嬉しい。評者はウェスレーに関しては誰よりもテイラーの影響が強いと考えるので感謝しつつ読んだ。

「メソジストの人柄」と訳された項も興味深いものであった。藤本は**”Character”**を人柄と訳しているのであるが、これは名訳である。この言葉は、霊性（スピリチュアリティ）とも関連するものであると思う。特に最近、出版されたマクグラスのキリスト教の霊性の中にはチャールズの讃美歌についての言及もある。多くの人がウェスレー兄弟の中に現代に通じる霊性を見いだしているのである。

ただ、この種の試みは危険性を伴うことも事実である。なぜならば解説者のウェスレー理解が解釈にも反映される可能性があるからである。この場合に大切なのは「ウェスレー自身に語らせる」ということであろう。この点においても、藤本の解説は公正である。非常に客観的にウェスレーの完全を述べている。ウェスレーの完全理解がさらに明確になる。特に、ウェスレーの目指していた完全が、「罪なき完全」ではなく、「罪と弱さを認識しつつ、聖化の道を邁進したウェスレーのメッセージ」が伝わってくる。この言葉に評者はどれだけ救われたであろうか。

その意味で、この書を読むと、完全理解に関して新たにされる。もう自分は聖化理解、完全理解に関しては、多くを知っており、これ以上知る必要がないと錯覚している人も、もう一度新たに読んでみることをお奨めする。必ず新しい角度から、「キリスト者の完全」という言葉で何をウェスレーが語りたかったかが、わかってくると思う。特に評者は「心騒ぐ時はいつでも、祈るために退き、神の恵みと光を心に迎えて決意を固めよ。それらの決断がど

のような成果をもたらすかについては、心配してはならない」（本書 241 頁）という言葉が心に残った。この言葉を読んで感動した。本当にその通りだと恵みをいただいた。信仰の原点に立つことができる書物である。

さて、最初の評者の疑問に、この書はどのように答えてくれたのであろうか。私たち人間には弱さや欠けがある。しかし主は忍耐強く、私たちを導いて下さる。そしてついに、キリスト以外に頼る術のないことを自覚し、キリストが心の王座に大統領として座ってくださることが実現する。それがこの世で経験可能な恵みとして与えられている。ただし、それは自己の行為の力ではなく、一方的な神の恵みとして体験可能なのである。これは何という素晴らしい希望であり福音であろうか。そのような目標をもって、日々、「完全化していく完全」を味わいたい。この書はデボーションにも使用できる。一読をお奨めしたい。

（日本ナザレン神学校教授）